

ダニエル書 - 第百六十五番

預言のタペストリーを解き明かす：アレクサンドロス大王から現代のローマまで

Jeff Pippenger

2024-03-29

これから、アレクサンダー大王の突然の死の後に展開した歴史を考察する。これは、西暦538年から1798年に訪れる終わりの時までを表している。

彼が立ち上がると、その王国は砕かれ、天の四方へと分けられる。それは彼の子孫のものとはならず、彼が支配していたような権勢にはならない。というのも、その王国は引き抜かれて、彼の子孫ではない他の者たちのものとなるからである。南の王は強くなり、その家臣のひとりもまた強くなる。やがてその者は南の王よりも強くなって支配権を握り、その支配は大いなるものとなる。やがて時がたつと、彼らは互いに同盟を結ぶ。南の王の娘が協定を結ぶために北の王のもとへ行くからである。だが彼女は支援を保てず、彼も持ちこたえられず、その力も保てない。やがて彼女は引き渡され、彼女を連れて来た者たちも、彼女を生んだ者も、この時に彼女を強めた者も同様に引き渡される。だが、彼女の根から出た若枝のひとりがその地位に立ち、軍勢を率いてやって来て、北の王の要塞に侵入し、彼らに対して行動を起こして、勝利を収める。また、彼らの神々や君侯たち、銀や金の貴重な器を戦利品としてエジプトへ持ち去る。彼は北の王よりも長く存続する。こうして南の王は相手の王国に攻め入り、やがて自分の地に帰る。ダニエル書 11:4-9。

やがて、アレクサンドロス大王の王国が分割されると、旧王国の支配を争っていた勢力は次第に二つの主要な王国へとまとまっていった。一方はアレクサンドロスの旧帝国の南部を支配し、もう一方は北部を支配した。その時点以降、その預言の叙述では、彼らは単に「南の王」と「北の王」として呼ばれる。世界支配をめぐる争いが北の王と南の王の間のものでのみ描かれる段階に達すると、その二つの王国を指す呼び名は章全体を通して使い続けられる。

第五節において、南の王が立てられ、彼は強大であるが、北の王もまた強く、その王国はいっそう広大である。次いで第六節において、南の王は北の王国との同盟を提案する。この平和条約は、南の王がその娘を北の王に与えることによって確立される。すなわち、北の王が彼女を妻とし、家族のきずなによって両者の同盟を批准するためである。北の王はこれに同意し、自分の妻を退けて、南から来た王女をめとり、こうして同盟は開始された。

やがて南の王女は男の子を産むが、ついには北の王は新しい妻に飽き、その最初の妻にしたのと同じように彼女を退け、最初の妻を再び迎え入れる。だが、元の妻が復位し、機会を得るや否や、彼女は北の王、その南の花嫁、その子、および彼女に付き従っていたエジプトの従者たちをことごとく殺害する。元の妻が南の王女とその子を殺したこの行為は、南の王女一族を激怒させ、その兄弟の一人が軍勢を起こして北の王国に攻め入る。

南の軍は北の王に勝利し、北の王と彼の南の花嫁およびその子を殺害した最初の妻は、その後処刑される。父の死に当たって北の王位に就けられていた元の妻の息子は、南の王に捕らえられ、以前の戦いで北の王国が南の王国から奪っていたいくつかのエジプトの遺物や偶像とともに、エジプトへ連れ戻される。エジプトに着くと、捕らえられた北の王は落馬して死ぬ。ユライア・スミスは、この歴史を次のように特定している。

「第6節. 幾年のちに、彼らは互いに結び合うであろう。南の王の娘が、協定を結ぶために北の王のもとへ来るからである。しかし彼女は腕の力を保つことができず、彼も立ち続けることができず、その腕もそうではない。だが彼女は引き渡され、彼女を連れて来た者たちも、彼女を生んだ者も、この時に彼女を支えた者も、引き渡されるであろう。」

エジプトとシリアの王の間では、たびたび戦争が起こった。とりわけそれは、エジプトの第2代王プトレマイオス・フィラデルフォスと、シリアの第3代王アンティオコス・テオスのときに顕著だった。やがて彼らは、アンティオコス・テオスが前妻ラオディケとその二人の息子を離縁し、プトレマイオス・フィラデルフォスの娘ベレニケと結婚することを条件に、和睦することで合意した。そこでプトレマイオスは、莫大な持参金を添えて娘をアンティオコスのもとへ連れて行った。

「しかし、彼女はその腕の権勢を保てない。」すなわち、アンティオコスのもとでの彼女の寵愛と権勢のことである。そして実際そうだった。まもなく、恋情に駆られて、アンティオコスは前妻ラオディケとその子らを再び宮廷に呼び戻した。すると予言はこう言う。「彼 [アンティオコス] も立たず、その腕」-すなわち子孫-「も立たない。」寵愛と権力を取り戻したラオディケは、彼の気まぐれな気質ゆえに、アンティオコスが再び自分を辱めてベレニケを呼び戻すのではないかと恐れ、そうした事態を確実に防ぐには彼の死以外に有効な方策はないと考え、ほどなくして彼に毒を盛らせた。さらに、ベレニケとの間の子も王国を継ぐことはなかった。ラオディケが事を巧みに運び、長子セレウコス・カリニコスに王位が渡るよう取り計らったからである。

しかし、そのような悪は、預言がさらに告げるとおり、また後の歴史がそれを証明しているように、長く無罰のままではいられなかった。

7節. しかし、彼女の根の一つの枝から、一人がその地位に立ち上がり、軍勢を率いて来て、北の王の要塞に入り、彼らに対して事を構え、勝利を収める。8節. 彼はまた、彼らの神々と彼らの君侯たち、および銀と金の貴重な器とをエジプトへ運び去り、そして彼は北の王よりも多くの年を生き長らえる。9節. こうして南の王は彼の王国に入り、自分の地に帰る。

ベレニケと同じ根から出たこの枝とは、彼女の兄プトレマイオス・エウエルゲテスのことであった。彼は父プトレマイオス・フィラデルフォスの後を継いでエジプトの王位に就くやいなや、妹ベレニケの死の復讐に燃え、大軍を起こして、北の王、すなわち母ラオディケとともにシリアを統治していたセレウコス・カリニコスの領土に侵攻した。そして彼は彼らに対して勝利を収め、シリア、キリキア、ユーフラテス川以東の上方地域、そしてほとんど全アジアを征服するに至った。ところが、帰還を迫る騒乱がエジプトで起きたとの報を聞くと、彼はセレウコスの王国を略奪し、銀四万タラントンと貴重な器物、さらに神像二千五百体を奪った。その中には、かつてカンビュ

セスがエジプトから奪いペルシアへ運び去った神像も含まれていた。エジプト人はひとえに偶像崇拜に耽っていたため、長年ののちこのようにして彼らの捕らわれの神々を返還したことへの賛辞として、プトレマイオスにエウエルゲテス、すなわち「恩人」の称号を与えた。

ニュートン主教によれば、これは古代の歴史家たちから抜粋されたヒエロニムスの記述であるが、同じ事柄のいくつかを裏づける現存の作家もいるという。アッピアノスは、ラオディケがアンティオコスを殺し、その後ベレニケとその子も殺したので、その仇を討つためにフィラデルフォスの子プトレマイオスがシリアに侵攻し、ラオディケを討ち、バビロンにまで進んだと伝える。ポリュビオスからは、エウエルゲテスと呼ばれるプトレマイオスが、姉ベレニケに対する残酷な仕打ちに激しく憤り、軍を率いてシリアへ進軍し、セレウキアの都市を奪取し、その後数年間はエジプトの王たちの守備隊によってそこが保持されたことを知る。こうして彼は北の王の要塞に入り込んだ。ポリュアイノスは、プトレマイオスがタウロス山脈からインドに至るまでの一帯を、戦争も戦闘もなく掌握したと断言する。しかし彼は、その功績を息子ではなく父に誤って帰している。ユスティヌスは、もしプトレマイオスが内乱のためにエジプトへ呼び戻されなかったなら、セレウコスの王国全体を手中にしていたはずだと主張する。こうして南の王は北の王の支配圏に入り、預言者の告げたとおり、自国へ帰った。そしてまた彼は北の王よりも長く生きた。というのも、セレウコス・カリニコスは亡命の身で落馬により死に、プトレマイオス・エウエルゲテスはそれより四、五年長く生存したからである。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』250-252頁。

ローマ、すなわち北の王に関する予言的な特徴は、王位に就くには三つの地理的障害を征服しなければならないということである。アレクサンダーの分裂した王国ののちに現れた最初の北の王の地位は、紀元前316年から312年の間のしばらくの期間、南の王であるプトレマイオスに将軍として仕えていたセレウコス・ニカトルによって確立された。五節はこの事実に言及し、こう述べている。「南の王は強くなり、彼の臣下の一人もまたそうである。その者は彼よりもさらに強くなる。」プトレマイオスは南の王であり、彼には（彼の臣下の一人である）将軍がいて、その者はプトレマイオスよりも強くなる運命にあった。そして五節の最後の句は「彼は支配権を得、その支配は大いなる支配となる」と言っている。プトレマイオスの将軍セレウコスは、最初の北の王となるはずであった。しかしセレウコスが北の王となるためには、南の王から離れ、その後三つの地理的地域を征服する必要があった。

セレウコスが最初に征服したのは、紀元前301年の東方であった。続いて、カッサンドロスの後継者が支配していた西方を紀元前286年に征服し、さらに紀元前281年にはリュシマコスを打ち破って北方で第三の領土を手に入れた。北方の王は紀元前281年に王位に就いた。

後に南の王と結ばれた和平条約は、紀元前252年に成立した。六年後の紀元前246年、ベレニケ（南の王女）とその息子、および随員全員が殺害された。その後、南の王はラオディケの子セレウコス・カリニコスを捕らえ、エジプトに連れ帰ったが、セレウコス・カリニコスはそこで落馬して死亡した。最初の北の王の治世は紀元前281年から紀元前246年まで、すなわち35年間であった。

第十一章の最初の北の王は、王座に据えられるために三つの地理的障害を征服した。異教ローマもまた、王座に据えられるために三つの地理的障害を征服し [ダニエル書 8:9 参照]、教皇ローマも王座に据えられるために三つの地理的障害を征服した [ダニエル書 7:20 参照]。現代ローマもまた、王座に据えられるために三つの地理的障害を征服する [ダニエル書 11:40-43 参照]。

いったん王座に据えられると、北の最初の王は三十五年間支配した。いったん王座に据えられると、異教ローマは「一時」（三百六十年）の間支配した。いったん王座に据えられると、教皇制ローマは「一時と二時と半時」（千二百六十年）の間支配した。いったん王座に据えられると、現代ローマは象徴的な四十二か月（また「一時」とも記されている）の間支配する。

ホワイト姉妹は、「ダニエル書11章に記録された歴史の多くは繰り返されることになる」と私たちに知らせています。彼女は続けて31節から36節を引用し、「これらの言葉に記されているものと類似した光景が起こるでしょう」と述べています。これらの節では、教皇ローマ（荒廃をもたらす忌むべきもの）が538年に王座に「据えられ」、その後1798年に最初の「憤りが成就する」まで、「多くの日々」（千二百六十年）のあいだ神の民を迫害しました。31節から36節の歴史は11章の最後の6節で繰り返されますが、その歴史はまた、5節から9節にも完全に予表されていました。

紀元前281年にセレウコスが北の王として即位したことは、538年と一致する。いずれも、三つの地理的障害を征服し終えた時点での北の王の即位を表している。ローマ教皇の支配期間は、いくつかの表現で示される。1260日、42か月、一時・二時・半時、一定の期間、そして3年半。セレウコスの統治は35年間続き、35の十分の一、すなわち什分の一は3年半である。35年の十分の一は「3.5」年とも表記される。「3年半」はローマ教皇の支配期間の象徴である。

教皇権は1798年、南の王であるナポレオン・ボナパルト（「幸運な息子」を意味する）が教皇を捕らえるために将軍を派遣したとき、致命的な傷を負った。翌年の1799年、教皇は流刑の身で死に、南の王に捕らえられていた最初の北の王も同様に死んだ。セレウコス・カリニコスは、エジプトで捕囚の身であったとき、馬から落ちて死んだ。獣にまたがっていたのは教皇である。その獣は、教皇が自らの悪魔的な働きを成し遂げるために用いた政治体制を象徴していた。その獣は1798年に打ち倒され、その獣にまたがりその上に君臨していた教皇は翌年に死んだ。セレウコス・カリニコスは、（彼が乗っていた獣である）馬から落ちて死んだ。1798年と1799年における教皇権の捕囚は、最初の北の王の捕囚によって完全に象徴されていた。

南の王が北の王に対して怒りを向けるに至ったのは、和平条約が破られたからであり、それは南の花嫁ベレニケが退けられ、その後ラオディケの手にかかって殺害されたことで示されている。ナポレオンは1797年、革命期フランスと教皇領との間で和平条約を結んだ。条約は、締結が行われたイタリアのアンコーナにあるトレンティーノという町にちなんで名付けられた。1798年2月、フランスが教皇を拘束したときに、この条約は公式に終わりを迎えた。条約が破棄された理由は、フランスが自らの革命を広めようとしたためである。

ナポレオン配下のデュフォ将軍は、当時フランスを統治していた総裁政府が派遣したフランス遠征軍の一員として、1797年にローマにいた。ローマに滞在していたデュフォ将軍も参加したこのイタリア遠征の目的は、イタリア半島でフランス革命軍が樹立した短命の従属国家であるローマ共和国を支援することだった。この時期、フランスはヨーロッパ各地で革命運動を支援し、革命思想を広めることに積極的に関与していた。イタリアでは、君主政を打倒し、フランス共和国を模した共和国を樹立しようとした。

ローマにおけるデュフォの存在と行動は、教皇領の支持者や地元の貴族を含む保守派勢力の反発を招いた。1797年12月、フランス軍と教皇領支持者の衝突のさなかにデュフォ将軍が暗殺され、これにより、翌年ナポレオンがベルティエ将軍を派遣してローマ教皇を拘束するための口実が整った。南の王と北の王の間の和平条約が破られたことが、両方の歴史において、南の王によって北の王が捕らえられることの理由となった。

第八節には、「また、彼らの神々を、その鑄像と、銀および金の貴重な器と共に、捕虜としてエジプトへ携え行くであろう」とある。プトレマイオスがこの節の成就としてエジプトへ帰還したとき、エジプト人は、先に北の王によって彼らから奪い去られていた偶像や工芸品を返還したその功績をたたえ、彼に「エウエルゲテス」（恩恵者）という称号を与えた。1798年には、フランス軍によるローマの略奪が起こった。歴史家たちは、ただ一日だけでも、嚴重な軍の護衛の下、五百台の馬車が都を離れて行くのが目撃されたと記録している。

その行列には、フランスが破棄されたトレンティーノ講和条約に従って接收していた、古代の彫刻およびルネサンス絵画の莫大な数が含まれていた。これらの美術作品には、ラオコーン群像、ベルヴェデーレのアポロン、瀕死のガリア人、クピドとプシュケ、ナクソスのアリアドネ、メディチのヴィーナス、ならびにテヴェレ川とナイル川の巨大像が含まれていた。また、ラファエロによるタペストリーおよび絵画、すなわち《キリストの変容》、《フォリーニョの聖母》、《椅子の聖母》、ティツィアーノの《サンタ・コンヴェルサツィオーネ》、そしてそのほか多くの作品も含まれていた。これらの盗まれた宝物が、1807年に開館したルーヴルのナポレオン美術館に展示されたのは、それから数年後のことであった。プトレマイオスがエジプト人の財宝を返還したことで称賛されたように、ローマから運び去られた財宝は、ナポレオンの名を冠した美術館の一部に置かれた。

第五節から第九節までは、538年に始まり1798年および1799年に終わる歴史と完全に並行している。それらは第三十一節から第三十六節に一致しており、それはこの章の最後の六節において表されていて、そこでは、現代のローマが三つの障害を征服しつつ最終的な権勢を与えられ、ついには助ける者もなくその終わりに至ることが描写されている。続いて第十節は、1989年の歴史を扱っている。

しかし彼の子らは奮い立って大軍を集め、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り過ぎる。やがて彼は引き返し、彼の要塞に至るまで再び奮い立つ。ダニエル書 11:10.

第十節の歴史的成就是、1989年を予表している。その時、教皇制はロナルド・レーガンとの秘密同盟のもとに、ソビエト連邦を「押し流し」「通り過ぎ」、ペレストロイカの余波の中でソビエト連邦（USSR）が解体するに及んで、その要塞、すなわちロシアだけを

残した。

終わりの時には、南の王が彼に攻めかかり、北の王は戦車と騎兵と多くの船を従えて、つむじ風のように彼に向かって来る。彼は諸国に侵入し、洪水のように押し流して通り過ぎる。ダニエル書 11章40節。

第10節に描かれている歴史は、紀元前246年に南の王が北の王を征服したことに対する報復を表し、また1798年に南の王が北の王を征服したことに対する報復を象徴している。第40節は、1798年の「終わりの時」に南の王（無神論のフランス）が北の王（教皇権）に致命的な傷を負わせたときに始まり、1989年の「終わりの時」におけるソビエト連邦の崩壊によって成就した。1798年の「終わりの時」は、第40節の「そして終わりの時に南の王は彼に突きかかる」という句によって示されている。節の最後の部分を区切っている「コロソ」(:)は、1989年の次の「終わりの時」を指し示している。「また、北の王は戦車と騎兵と多くの船をもって、つむじ風のように彼に攻めかかり、諸国に入り、押し流して通り過ぎる。」

次回の記事でこの研究を続けます。

歴史の舞台に登場したすべての国は、「見張る者と聖なる方」の目的を果たすかどうか明らかにされるように、地上で自らの場所を占めることを許されてきた。預言は、世界の大帝国—バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ—の興亡をたどってきた。これらの帝国においても、また力の劣る諸国においても、歴史は繰り返された。それぞれには試練の時期があり、いずれも失敗し、栄光は色あせ、力は失われ、その地位は他の者に占められた……

聖書のページに明らかに示されている諸国の興亡から、人々は、外面的でこの世的な栄光がいかにか無価値であるかを学ばなければならない。バビロンは、その権勢と栄華——それは、その後この世界が目にしたことのないほどのものであり、当時の人々にはじつに堅固で永続するようには見えたとその力と栄華——が、いかに完全に過ぎ去ってしまったことだろう。「草の花」のように、それは滅び去った。神を土台としないものはすべて、そのように滅びる。神の目的に結びつき、その品性を表すものだけが存続しうる。私たちの世界が知っている確固たるものは、神の原則だけである。教育、177、184。